

「滿洲道路の黎明」

(戯曲)

西 慶 山

時 康徳三、四年頃

處 鮮滿國境に近い滿洲國のある地點

人物 松崎 良一 青年技士

甲野 鶴吉 土木請負業代理人

崔 明 玉 十七歳位の姑娘

崔 星 龍 明玉の兄

測量人夫數名

警備隊指揮官外滿警露警等數名

官吏、縣長、其の他地方有志數名

群 集

第一幕

第一場

朝鮮國境に近い千古斧鉞を入れたことの無い大樹海の中である。夜がやうやく明け離れたばかりの澄んだ青空の彼方に靈峰富士の姿にも似た白頭山の頂きが、白銀の装ひをこらして薄い白雲の上に聳えてゐる、その裾野は舞臺につづく一面の濃緑黒の大樹海で、主として針葉樹林であるが、所々に白楊や白樺の白い樹幹が點綴してゐる。

舞臺右手寄りに板圍の粗末な小屋があり測量用のポールなどが立てかけてある、適當の箇所には白楊の立木があり緑のままに枯れた葉がマバラにこびりついてゐる、舞臺は一面にその落葉である。中央小屋寄りに焚火を圍んで測量班

の人達や組（土木請負業者）の者が數人話し合つてゐる。小屋の一隅からは炊事の煙が洩れて来る。

松崎は白晳の面長な青年である、頑丈といふ體の持主では無い、併し古びた内地の學生服にダートルをしつかり巻いて颯爽としてゐる。焚火にあたり乍ら話しかける。それに答へてゐる藤井組の甲野は遅ましい四十がらみの壯漢である。建國前から十幾年も土木請負業の組下として働いてゐる數々の危難にも遭遇し、今では滿洲焼けのした天晴れ度胸骨の出來た男として通つてゐる、今度の測量班を世話してゐるのも調査完了次第いつでも組で工事を引受ける約束の下に出張してゐるのだ。

松崎『寒さから言ふともう秋なんでせうネ、此の山に這入つたのは僅か一と月半ばかり前でしたが、朝晩の涼しさは兎も角として、晝などは焼けつくやうな暑さでした。』

甲野『さうですネ滿洲は秋からもうすぐ冬ですよ、松崎さんは今年初めて滿洲の土を踏んだのでしたネ。』

松崎『さうです、學校を卒業して直ぐ滿洲へ志願して來ました。實は去年の夏徴兵検査を受けて不合格だったものですから、故郷に歸つても何となく片身のせまい思ひで、此の上は建國直後の滿洲で自分の學んだ學業をもとでに、東亞防共の聖業の爲めに働きたいと飛び出して來たわけなんです。』

甲野『ハハア感心ですネ、それでこそ日本男子ですよ、私なんか最初滿洲に來たときは、金儲けだけが目的でした。併し滿洲事變以來私の覺悟は變りましたよ。滿洲建國の理想の爲めに、將兵を初め政府の要路の人達も、また一般國民も一緒になつて、血みどろの働きをして居られるのをマザマザと見るとき、其の蔭に隠れて甘い儲けをしやうなどといふ氣は全くなくなりました。その爲めまだ私自身としては一本立ちも出來ない組下の仕立人に過ぎませんが、私は是で充分満足してゐます。今度の道路工事も損得は度外視してうちの親爺に請負はして見るつもりです松崎さんその意味で思ひ切り立派なルートを選定

して王道樂土建設の爲めに一と働きやつて下さい。』

松崎『承知しました。(あたりを見ながら)だが寒くなりましてなア木の葉が青いまままでカラカラと舞つてゐる。(しばらく間)時に匪情の方はどうなんでせうね。』

甲野『サア、大したことはありません。併し油断は出きませんよ。何しろ此の邊は匪賊の本場ですからネ、先づ大體匪賊は出るものと覺悟しなければなりませんね。さうさう此の前襲撃を喰つた時、明子ちゃんの兄さんが拉致されて仕舞つたが、今頃はどうかつてゐることとせうネ、明子ちゃんが兄ちゃんをさらはれて、それからズツと此の測量班について來て炊事の手傳ひなどしてゐますが、思へば實に可哀さうでなりませんよ。』

甲野は腕組をして考へ込む。

明子ちゃんとは崔明玉のことである。十七歳位の姑娘で一箇月程前匪襲を受けたとき人夫として雇はれた兄の崔星龍が拉致せられて、今までは此の班の炊事係をしながら兄の行衛を探してゐる。着物は相當垢染みてゐるが

顔立ちは稍美しく寂しげである。片言ながら日本語も少し出来るやうになつたし。班の人達は男世帯の紅一點として明子ちゃんと愛稱してゐる。

朝食の用意が出来たことを知らせる爲めに明子が小屋から出て來た。甲野は其の姿を見て、

甲野『明子ちゃん、もう御飯の用意が出来たのかい、御苦労さまだなア』

明子頷いて、

明子『さうよ、もう出來たのよ、早く皆さん暖いうちに召し上つて下さい。』と催促する。

甲野『さア松崎さん、おいみんな、食事の用意が出来たさうだよ、皆んなして明子ちゃんによそつて貰はうじやないか、行かう。』

甲野皆を促して明子のあとに續いて一同小屋の中に引揚げる、焚火のみ残つてゐる暫く間、

聽て警備隊の一團が來り焚火を圍む。日本人の指揮官の外に滿系警吏數名白系露人の警備兵數名併せて十人内

外、指揮官が指揮刀とピストルを腰にせる外夫れぞれ小銃を持つ、小時暖を取るや指揮官は警備兵を一行に並べ點呼を爲す。「休め！」の號令と共に、小屋の中より測量班の人達は仕度をして出て来る。人夫達は小屋に立て掛けてあつたポールやトランシット等をかいつで出發の準備をする。最後に明子がエプロンで手を拭き乍ら小屋から出て来て見送りの位置につく。

松崎「さア出掛けましょうか、」

指揮官「出かけましょう」

指揮官は向き直つて警備隊に前進の號令をかける。警備隊に續いて測量班の一行も出かける。

松崎 明子の方を振り向いて、

松崎「明子ちゃん留守を頼むよ」

と聲をかける、明子寂しげに頷く。

幕

第二場

同じ場面、但しもう晝頃である。明子はボンヤリと白楊の木にもたれて何か考へ込んでゐる。遠くから口笛の歌が

聲こゑる。明子ハツとして、

明子「あらッ、兄さんの口笛のやうだワ、」

そして樹間をすかして見る、段々口笛が近くなる、下手より兄の崔星龍が現れる、そして明子を見て不思議さうな面持ちで。立止る明子もこれを見て數歩兄の方へ馳け寄る。

明子「まア兄さんぢやないノ、」

崔「ムウ、お前は明玉ではないか、どうしてこんな所に居たんだ、」

明子「ああ嬉しい、到頭私の願がかなつたんですワ、私、兄さんを探しに来たんです、杖とも柱とも頼む兄さんを探しに来たんです。」

崔「さうか（そこに小屋があるのを注目しながら周圍を警戒してそツと云ふ）お前一人でか、」

明子「いいえ、測量班の人達と一緒にです、私一人ではこんな山奥には來られません、あなたが匪賊に連れて行かれてから、松崎さんや甲野さんにお願して炊事婦に雇つて

貰つて此處まで漸く來ることが出來ました。けれども此處で兄さんに逢はうとは……。』

明子は感極はまつて兄に縋りつきその胸に顔を埋める。

その時崔が左手に握りしめてゐる麻袋に氣がつく、麻袋には貨幣の重みがある、明子は怪げんに思つて一二歩兄の胸から退いて兄の顔を見つめる。崔はその視線を避けるやうにして尋ねる。

崔『明玉、測量班は今日はどちらの方角に行つたんだ。』

明子『私、わかりませんワ、ですが兄さん、何だか兄さんは訝しいじやありませんノ、兄さんは匪賊にさらはれて行き乍ら、怪我もしてないし、それに……。』

兄の麻袋に目を注ぐ、

崔『むウ、これか。』

崔は苦笑をしながら麻袋を振つて見せる、貨幣の音がする。

崔『明玉、話をしやう、その小屋には誰もゐまいだらう

ナ、』明子頷く。

崔は焚火の跡の焼け残りの丸太に腰をかける、明子はその前にたたずんでゐる。

崔『明玉、匪賊様々だよ、(ニヤリと笑つて)と云ふのはナ、

俺が捉へられて行つたのはもつと山奥の岩窟の中であつた。そこには匪賊の頭領がゐた、頭領といふのは三十歳の青年で岩窟の中に立派な絨氈を敷いて思つたより豪華な生活をしてゐたよ。俺は繩をほどかれて乾肉の一片を興へられた、別に俺を殺さうとする様子もないが逃げる機會は興へられなかつた。さうして三日位は匪賊の一團の中にまぢつて暮してゐたのだ、すると四日目位に頭領の前に呼び出された。俺は首筋に何か冷たいものが走るやうな感じで、頭領の前に引立てられて行くと、其の時頭領が俺に呉れたのがこの金袋だ、俺は全く意外だつたよ、さうして賊は何の爲に此の金を呉れたのか反問したかつたが、唇がふるへて何にも言ふことが出來なかつた。併し頭領は俺を前に立たして一時間餘りも熱心に何

第二幕

か説きたてた、何のことかサツパリ俺には解らなかつたが共産主義と言ふ言葉が時々繰り返された、そして俺に誓約をしると言ふのだ、只もう金を呉れた嬉しさと命ほしさの爲に到々俺は其の誓約に加盟してしまつたのだ。

頭領は俺の命を預ると云つた、さうして昨日解放される時に諜報の役目を負はされて仕舞つたのだ、ああもう法子だ、お前がついて來た測量班の行衛を匪團に知らさなければならぬ、そして俺はまたもつと澤山の銀貨を貰ふのだ。』

星龍は話し乍ら物につかれたやうに歪んだ笑と共に昂奮した、それを聞き乍ら明子は身をふるわして兩手で顔を覆ふた。星龍はイキナリ走り出さうとする、明子はきつとなつて星龍を睨む、そして取継る、星龍はそれを振り放つて馳け出す。

明子『アレ兄さん、それはいけません。』

明子はまた取継る、星龍はそれを足蹴にして馳けて行く。

幕

密林の中である。薄く廣く根を張つた大木が倒れてゐる、向ふに小高い丘があり銃火がひらめく、背景の白頭山の位置が前場と異つてゐる。銃火のひらめきと共に銃聲が聴える。

上手の樹間から指揮官を先頭に警備隊の四、五名が現れる。その跡から手負ひの隊員をかついで警備兵と残りの警備兵が現はれる。銃聲は愈々激しくなり機關銃の音が交ちる。

指揮官は指揮刀を打振りつつ屹と向ふの丘を睨む。

指揮官『ア、中々頑強な奴等だ、少くとも二百名は居るだらう。サア今一と息だ、撃てつ撃てつ』

隊員はそれぞれの位置に銃を構へて應戦する、その中に二、三名の隊員が敵弾の爲にやられる。

松崎と測量班の人達がころげる様に一同固まりになつて飛び込んで來る。そして倒れてゐる大木を小盾に息をこらして戦闘の様子を見てゐる敵の銃聲は段々近くなる

の最も欣幸とする處であります。抑々我が滿洲國は建國以來僅かに四年、併も驚異すべき發展を遂げつつありますことは、今や世界の最も關心事とならんとしつつあるのであります。殊に政府が其の發展の原動力たる道路網の整備を圖らんとするに對し、我國の地方民は率先之に協力して、或は其の努力を提供し、または其の貴重な

土地を寄附し、之が建設に努力せられつつありますことは道路の開發に非常なる便益を得、益々其の成果を擧げつつある所以であります。道路當局者の欣びのみならず、東亞防共の基礎を萬代の上に築かんとするもので國家の多幸之に過ぐるものは無いと信ずるものであります。而て本道路の開通に依つて今や本地方の治安は全く確立するに到りました。産業の振興、文化の發達は此の基礎の上に今後益々向上せんとしつつあります。併し乍ら願ひまするに本道路着工の當初は實に荊棘の道を攀ぢ上るものであります。治安は極度に悪く、匪賊は蜂起し、隨つて本道路の達成の上には數多くの犠牲者をす

出したのであります。

松崎良一君の如き前途有爲の青年をも、此の峠に失つたのであります。

今あれに見えまする殉難碑を見るにつけましても實に感慨無量のものがあります。(甲野君感激して落涙する)

願くば諸君、此の尊き犠牲に對し滿腔の感謝を捧げ以て其の靈を慰めやうではありませんか、そして東亞永遠の平和の爲に犠牲となつた人々の志を受け継ぎ、本道路の使命達成の爲めに將來益々道路愛護の實績を擧げやうではありませんか。簡單乍ら之を以て式辭と致します」拍手起る。

次に司會者が「工事擔當者表彰」と呼びあける。官吏は表彰狀と金一封を手にして待つ。司會者「甲野鶴吉君」と呼ぶ。甲野君進み出る。

官吏「甲野鶴吉君、君は藤井組工事代理人として終始本道路の建設に従事し、幾多の危難を排除して良く今日の成

果を齎したり、其の功績の顯著なるを認め、之を表彰し、併せて金一封を授與す』

甲野君は恭しくそれを受け、席に着くと共に、再び立つて一同に呼びかける。

甲野『皆さん、甚だ勝手なことを申すやうですが、此際暫く時間を拜借したいと思ひます。どうか御許し願ひたいと思ひます』

そして一同に敬禮するや、ツカツカと松崎君の殉難碑の前に到り、暫く黙禱する。そして碑に對して言ふ。

甲野『松崎君、私は此の道路の竣功に就て表彰を受けました。併し松崎君、本道路の達成に就て、此の席に於て第一に表彰を受くべきものは貴方であつた筈です。併し貴方は今地下に睡つて居られます。私はあの遭難のとき、貴方だけを殺すに忍びませんでした私も共々とは思ひましたが、私にも生前の貴方と同様、本道路の達成に就ての使命がありました。友情の無い奴と、どうか思はずにゐて下さい。貴方の測量したルートは今日完全に素晴ら

しい道路となりました。貴方は此の丘の上から眺めてゐて下さるでせう永遠に永遠に、それから甚だ厚かましいと貴方は仰しやるかも知れませんが此の金一封は、年老ひた貴方の母上をお慰めする爲に貴方の故郷に送ります。私としては此の金をどうしても自分の爲めに使ふ氣にはなれません、どうか差出者の願を御許し下さい』

生ける人に物言ふ如く聲涙ともに下つて席に着く、一同感動の色あり。司會者が『それでは之より開道を行います』と挨拶する。道路に張られたテープが切られて一同は列を爲して新道を通る氣持にて舞臺を去る。群集之につづく、と一人群集に取り殘された男が茫然と立つてゐる。良民となつた崔星龍である。人々の立ち去つたのを見て明玉の墓前に近づく、そして伏し拜みながら悔恨に泣く。幕

(著者云ふ、本編は職務多忙の間に、二時間餘りで書き上げた、言はば草稿である。今は之を改訂する餘裕もない、他日想を整へて書き直し輕忽の御詫びをしたいと思います。康

七一、二、一三)